

## 二つの調査 からの感想

(東京)

園田 恭一

事務局の方からは、今総合研究費を受けて行っている「町村合併と村落構造」の調査を、今秋の大会のテーマと関連させて書くようにとのお話しでしたが、これはまだやつと基礎的な資料の蒐集が終つたという段階で、その整理や、全員での討議や再調査なども今後に残されていますので、以下では、この夏に私が参加させてもらったもう一つの十日町市調査と合せて、二、三の感想を記し、實をよさかせていただきたいと思ひます。

十日町はいうまでもなく、日本でも有数な積雪地帯であり、又織物の町としても知られていますが、それが今日の町村合併で周囲の山間部をも含む総面積一五〇平方キロを越える「市」となりました。私が分担した地域はその新市域の一つで、市街地からバスで三〇分、そして更に同じ時間くらい歩くという山奥の

三つの部落でした。もちろん冬はバスも運休になるので、足の便は更に悪くなります。各部落とも五反前後の零細な耕地に依存している農家が大半を占め、更には養蚕や薪の販売などの副業も下向線をたどっていることと合せて、農業経営を前進させてゆくには全く恵まれてない地域です。そんな訳で、ムラからの通勤などは不可能で、二、三男や女子は中学校を出るとほとんどが東京などの都会に住込みで出かけ(女子は町の娯楽が多い)、更に長男や一家の主人なども、農閑期には土方などをしてその生活を支えているというところ

です。他方総合研究のフィールドとして選ばれた地域は、愛知県の安城市に含まれている農村で、こゝは戦前その多角経営と産業組合活動とで、日本のデンマーク地帯として名を馳せていたことは、ご存知の方も多いことと思ひます。もつとも今度行つた印象では、デンマーク云々というのは、この地域の農業経営の指導者として高名な山崎延吉氏などのP・K的才によるところも多しように思われ、事実、戦争による作付統制などによる減少ということなどを考慮するとしても、今日では水田率は七五%近く、養鶏や多少の果樹などを別とすれば、その他の商業的農業は、むしろこれから新農村建設の補助金などによつて進めてゆくことが計画されているという状況です。この点はともかくとして、気候や立地などの点で、先の十日町などと比べれば、はるかに

恵まれている地域ですし、そして田辺が岡崎豊田、刈谷、碧南、西尾などの諸都市にぐるりと囲まれているため、交通の便の悪い二、三の部落を除いては、通勤労働者の数もかなりみられます。

このような条件を考へてみますと、社会関係や政治構造という面でも、十日町と比べて安城の方がより「進んだ」ものだろうと私は予想してました。もつとも、この「進んで」いる」とか「遅れている」とかいう言葉は、農業について問題にする場合においても、特に農村や農民の意識を問題にする際には一層のこと、その便の方や基準をはつきりさせておかなければならないと思ひます。以下の問題はこの点とも関連するのですが、まず二つの地域の市会議員の党派別構成をみてみますと、十日町では総議員三〇名中革新系が四名(共産党二、社会党一、社会党系一)を占めるのに対し、安城市では革新系は一人も当選してません。両地域を通じて保守系の議員が部落や旧村などを背景とする地域代表として送り込まれていることはいうまでもありませんが、この点からして、革新系の弱い安城市のばあいでは、部落の枠を越えて当選している議員は創価学会の二名と、K継続や地評をバックにした議員にすぎません。他方十日町市のばあいでも、保守、革新系を通じて、地元代表、更には織物の商店などの職域代表という性格をもつてはいるのですが、そのうちで共産党議員の一名がほとんど農村部の票によ

つて三期連続(村議当時を含む)して当選していることが注目されてよいと思われまゝ。ここでは、二つの地域を比較する際に欠くことの出来ない産業構造や戦前からの土地所有や経営規模の分化などのデータが未整理なので、早急な結論は避けなければなりません。十日町で私の分担した地域が、丁度共産党市議の出身部落を含んでいましたので、以下ではこの点を中心に二、三の問題を考えてみることにしたいと思います。

ところでその議員の居住しているW部落は、戸数わずかに一六戸に過ぎませんので、準地元の旧学区の票を加えても、市議ともなるとまだ不足です、ということ、周辺に票を食われる、まともりの悪い、更には革新系の部落のあることが予想されます。事実、隣接するS部落は戸数がW部落の四倍強もあるにも拘らず(六二戸)、部落出身の候補者が落選するというまともりの悪いムラであり、そして更にその隣りのU部落は(戸数四二)部落民の大半が革新系支持という革新系部落の性格をもっているのです。まともりの悪いというS部落は、解放農地国家保健連盟の都の副会長をしているK氏を始めとする自由民主党員と、地区の責任者となつてゐるT氏他数名の共産党員が同一のムラの内に居住して争つてゐるという日本ではめずらしいと思われるところです。革新部落といわれているU部落は、十名近くの青年を中心として経済学の学習会や演劇、サークルなどがもたれてい

るといふムラです。と、いへば、これらのムラの農民が全部「政治的」であるとするのは危険で、残りの大半は「無党派的」であるといふのが実状でしょう。けれども「無党派的」であるといふことは、支配的傾向になびく、あるいは黙認するということでもあります。それがこれらのムラの場合、前に記したような部落の性格というものを形づくつてゐるのだと思われまゝ。

これを部落費の取立て方という面でもみてみると、S部落では、部落費(全戸)、農家組合費(農家のみ)、養蚕組合費(関係農家のみ)というように別立てになつており、又W部落では、土木費や学校後援会費などは部落費とは分離して、必要が生じた際に徴収するというようにその使途別にはつきりと分離されており、更にその賦課方法という面でも耕作反別などによる段階割が七割五分で、平均割は二割五分というようになり合理化されてゐます(U部落)。このように、古い形での規制や統一が弱められてゐる部落が存在していることが、共産党議員を当選させている基盤であることは否定出来ないように思われます。

他方安城で蓮見さんと一緒に分担したN部落は戸数二八三戸の大都市近郊の部落はいづれも二〇〇戸前後の大都市という特色をもつてゐます。そこでは部落民から一戸一票の投票で選出された一二人の評議員が、互選によつて一般の部落長に当る住民組

合長、代理者、会計、土木主任などの役職を決め、更には住民組合長は有給で午前中は区役所に常駐しているという一つの行政村的性格をもつてゐるところです。農協も戦前の産業組合の時代から各部落毎に別々にもつてゐます。そんな訳ですから、市議も評議員会の推薦などによつて、ほと一部落から一人ずつ選ばれるので、前記のように、革新系の進出の余地はほとんどありません。十日町では部落の枠を破つて活動している青年団も、安城では部落毎に分断されて、(リクリエーション、研修会などの連合組織はありません)、N部落では部落から年三万円近い「補助金」をもらつていたり、更には毎年各部落毎に住民組合長の推薦による一、二名の「優秀な青年」が上級の研修会である青年大学に参加してゐるといふ状況です。青年はもとより通勤者たちも非農家にも水利や土木の費用の一部を負担させる高額の部落費や、各戸毎の目標額の「寄附金」などに対する軽減の働きかけというようない「政治的」な活動はあまり行つていません。保守、革新を通じて党員は皆無

に近いようです。

ところで、この地域の部落は、藩政期には一つの独立の村を形成してゐたものが多く、その上各小藩に分割されて支配されてゐたためもあつてか、明治三十九年以来そのうちの九つが統合して明治村を形成して来たにも拘らず、今回の町村合併では再び分裂して安城市へ六つ、他の二つは西尾、一つは碧南という

ようにばらばらに吸収されてしまったのです。これは、周辺に同じような力の都市が群をなしているということ以上に、先にみたような各部落の独立性の強さ、逆にいえば行政村のまとまりの悪さの結果であると思われます。

それではこのような部落のまとまりの強さ弱さを規定する条件は何なのでしょう。多かれ少かれわが國の農村一般に通ずる家族的小経営という条件を一応別とすれば安城のN部落においては、共有地は一反以下でほとんど問題となりません。そうすれば、大は灌漑面積一万町歩と称する明治用水から、小は揚水機や溜池による申し合せ組合などが、さまざまに入り組んでいる水利關係がその基礎となつてゐるように思われます。けれども、これだけでは二割強の非農家や、半数を越える兼業農家がつちりと捕らえていけるでしょう。か、他方山間の十日町の部落において、旧来のムラへのまとまりを弱め、革新系職員を当選させているものは何なのでしょう。か、農業の先進地帯が必ずしも部落の構造の弱体化を結果せず、更にそれと農民の意識や政治的行動という面では、尚いくつかの媒介項が入つて来るように思われます。農村調査では全くの一年生で、結局は疑問も出しただけで終つてしまいました。この二つの調査を通して一番痛感していることは、部落のまとまりを強化する条件としての行政的締付けのもつ意味の大きさということと、逆にそれを打破つてゆくものとしての有能な土着の活動家の

役割の大きさということとです。一口に行政や政治といつても、時代によつて、そのもつ意味や構造には大きな違いがあるでしょうし、又それを過大評過することもあやまりでしょう。けれども、部落というものも、単にその物質的基盤の解明や集落や自然村という概念だけでは十分に把握出来ないものがあるように思われます。この意味からも、今度の大会のテーマに私が寄せている関心はとても大きなものがあるのです。

——附記、今回の安城市調査は福武先生の海外出張中を受けて、後藤先生以下一四人の参加によるものであり、又十日町市調査は、北川氏以下七人の継続調査の最終回に当るものです。調査の準備や実施の過程でのさまざまのご指導に感謝し、又その一部を使用させていただいたことをお断り致します。